# わあっ！ 逃げろ逃げろ

「さあ、あともうちょっとで、町へとうちゃくだ。もう少しのしんぼうだぞ。」

声をかけあい、峠にさしかかってきたのは、村から村へ巡業をしている、お芝居の一行でした。

きょうのおひる、お芝居のおわった村を出発しました。夕方までには、峠をこえることができるだろうと、座長は考えていました。ところが、どこで道をまちがえたのか、とんでもない山のなかに迷いこみ、もとの道へもどってくるあいだに、とうとう、日がくれてしまったのです。



お芝居の一行は、ぜんぶで百人はいましたから、たいへんです。お芝居の道具をつんでいる車だけでも、五十台はありました。

「さあ、ここが峠だ……。」

座長は、少しひろくなったところで、みんなをとめました。

あたりは、まっ暗闇です。

座長は、みんなにいいました。

「このまま町へおりていっても、宿はぜんぶしまっているだろう。宿の人をおこしてとまる交渉をするのもたいへんだし、きょうはここで、ねむることにしよう。」

座長は、一つだけ気にかかっていることがありました。

それは、この山に、昔から人食い鬼がすんでいる、というううわさのあることでした。

「だから、みんな気をつけるのだ。もしもそれらしいのがあらわれたら、すぐさま逃げることだ。」

座長は、そういうと、つづけて、

「まっ暗だと、鬼だけではなしに、オオカミなんかがでてくると危険だから、夜が明ける